

エディトリアル

地域医療研究所所長 山田隆司

第13回 へき地・地域医療学会のメインテーマは「地域から羽ばたく女性医師」でした。学会2日目のメインシンポジウムを今回の執筆陣の内の4人にお願いしました。そのうち女性演者はいずれも地域医療に携わる医師であって、それぞれ出産や育児と仕事を両立、あるいは時々どちらかを優先させながら地域貢献を果たしてこられた経験を語られました。医師として、母として、迷いながら、悩みながら、それでも地域というフィールドで、家族や地域の人に助けられながら、各々が仕事を全うしてこられた話をお伺いして大変感銘を受けました。当日参加できなかった全国の読者の皆さんにもぜひ伝えたいと思い、今回の特集としました。

今回の特集記事では石川鎮清先生には自治医科大学としての女性医師のサポート体制の現状、義務年限内のへき地勤務という問題を乗り越えるための取り組みを解説していただきました。今後増え続けるであろう女性医師のキャリア形成の支援につながることに期待したいと思います。十枝めぐみ、白石裕子両先生には地域での仕事の苦労や辛さを超える楽しさ、豊かさを述べていただきました。出産、育児を乗り越えて、実際に母として女医として地域のさまざまな課題に取り組まれてこられた内容に、臨床医としてのお二人の人間力にただただ尊敬するばかりです。

また佐藤優子先生には自治医大出身者ではない女性医師が、自ら志してへき地医療に関わり、自然体で出産、育児を乗り越えてこられた姿を述べていただきました。村山愛先生には今義務年限の中において、新しい専門医制度の中、自らプログラムを作りながら地域医療に取り組んでこられている現状を述べていただきました。若いお二人の先生の論文からはそれぞれ真っ向から地域医療に相對する誠実さが伝わってきて、今後令和の時代にさらに臨床医として飛躍されることが予感されます。

現在日本専門医機構の総合診療に関する委員会では、プログラムの中のへき地勤務のことが取りざたされています。へき地勤務を義務付けたことで志願者が減っているのではないかと。若い医師、特に女性医師にとってハードルが高すぎる。総合診療に限ってそのような条件を付加するのは不適切だ、等々。

医師のプロフェッショナルリズムとして最も重要なこと、国民が最も職業としての医師に期待しているものはなんでしょうか。少しでも多くの読者が今回の特集からその解の一つを読み取ってほしいと願っています。